

言葉と記憶と意識*

小 川 洋 通

LANGUAGE, MEMORY, AND CONSCIOUSNESS

Hiromichi OGAWA

0

本稿は、Chafe のいう Psychosemantics (これは Psycholinguistics の一部門を形成すると考えられるもの) をめざして、ことばと記憶、ことばと意識について、一考察を与えようとするものである。¹

人間の心の働きが、いかに、そのことばに影響を与えるか、逆にいえば、人間の用いることばが、人間の心の働きの理解に、いかに重要な手がかりを与えてくれるか、ということ、ここではみることになる。

1

Dennis とその両親との、つぎのような、やりとりがある。²

- (1) Father: Hi, Dennis! What's the news?
Dennis: Something terrible! Did ya know Mr. Wilson broke his arm?
Father: No!
Mother: How awful!
Dennis: He fell down his cellar stairs!
Mother: The poor man!
Father: When did this happen, Dennis?
Dennis: When he was a little kid my age. He jus' told me about it today!

この笑話における、おかしみは、Dennis が、

- (2) Mr. Wilson broke his arm.

のように言ったことに発している。この文を聞いた彼の両親は、とうぜん、そのできごとが、つい今しがた生じたものと受けとってしまう。ところが、それが意外にも、最後になって引っくりかえされる。

なぜ(2)のような文は、そのできごとが、つい今しがた生じた、という情報を伝えてしまうのであろうか。このことが、われわれにとって、まず当面の問題となってくる。なにはともあれ、Dennis は、時の副詞を用いて、たとえば、つぎのように言うべきであったことは想像できる。

- (3) When he was a little kid, Mr. Wilson broke his arm!
A long time ago, Mr. Wilson broke his arm!
Way back in 1930, Mr. Wilson broke his arm!

いま、うえに示したような副詞について見てみるなら、それらが文中にあらわれる、そのあらわれ方によって、文をおおきく三つの類に分けることができる。³

- (4) a. Steve fell in the swimming pool.
b. Steve fell in the swimming pool yesterday.
c. Last Christmas, Steve fell in the swimming pool.

ここで、とくに重要であるのは、(4b) における yesterday は低い声の高さ (low pitch) であるのに対し、(4c) における Christmas は高い声の高さ (high pitch) であることである。(4a) には時の副詞がない。

Chafe は、(4b) における副詞を、弱い時の副詞 (weak temporal adverb), (4c) における副詞を、強い時の副詞 (strong temporal adverb) と、それぞれ呼ぶ。一方は、文末にあらわれて、低い声の高さを有するものであり、他方は、文頭にあらわれて、高い声の高さを有するものである。このように、この三つの文は、副詞のあらわれに関して、三つの度

合を示している。つまり、それは、まったく副詞がない、弱い副詞、強い副詞である。

副詞が文末に来て、高い声の高さをうける、また、副詞が文頭にきて、低い声の高さで発音される、ということも考えられる。しかし、これは対照的な (contrastive) 意味のばあいであり、ほかの日でなく、まさに、きのう、あるいは、ほかの場所にでなく、まさにプールに、というときである。ここでは、このような対照的なばあいは、問題にしない。われわれは、(4) のような、非対照的な意味のばあいのみを扱う。

2

時の副詞をもたない、(4a) ないし (2) のような文のばあいを考えてみよう。ここで、明確にしておかねばならないことは、このような文が、すでに、時の指示を含む文脈で話されるばあいは、われわれの考察から除かれることである。言いかえれば、このような文が、言語的にであれ、また非言語的にであれ、ともかくも、時への言及がなされていない文脈、つまり、時の指示を含まない文脈で、だしぬけに発せられるようなばあいを、われわれは取りあつかうことになる。

こういう状況において、(4a) ないし (2) のような文が発せられるのは、とりわけ、そのできごとが、まだ話し手の心 (ないし記憶) に新鮮である、ということを示している。典型的には、話し手が、今しがた知覚したばかりで、まだ、彼の意識から消えないようなもののばあいである。

(2) の文が問題となるのは、すると、Dennis が、そのできごとについて聞き知ったことを、あたかも、それが直接知覚したかのように、相手にとらえられたことにある。このことは、また、直接知覚によって得られた認識こそが、重要なのであって、たとえば、ことばをとおしての認識は、重要でないことを示すことになる。

当面の情報が、話し手の意識のうちに、間断なく、ずっと連続的に存在しているという必要性はない。それが、彼の意識の表面近くにとどまっていさえすればよい。それは、意識の表面下をうろろうしながら、彼に、しつこくつきまとはって、たびたび表面に頭をだしてくるようなもの、と考えられる。

情報がこのような状況にあるとき、Chafe は、これを、情報が表面の記憶 (surface memory) にある、

という。情報が表面の記憶にあるとき、話し手は、それを時の副詞なしでも、正しく伝達することができる。(2) の文が問題であるのは、けっきょく、さきに述べたように、間接的な知覚と直接的な知覚とが混同されたことにある。⁴

情報が、表面の記憶からのもののばあい、もちろん時の副詞を用いて、つぎのようにあらわしてもよい。

(5) Steve fell in the swimming pool a couple minutes ago.

A couple minutes ago, Steve fell in the swimming pool.

けっきょく、情報が、表面の記憶によるばあいのみ、そのような副詞なしでも、それは適切に表現されうることになる。

3

表面の記憶に、何かがとどめられるのは、実際の、物理的な時の働きによってではなく、心理的、経験的な時の働きによるものである。一般に、表面の記憶にある情報は、比較的、さいきんの時に知覚されたものである傾向にあるが、時の範囲は、その情報に対する、個々人にとっての重要性によって異なってくる。だから、つぎのような文は、すべて表面の記憶からの情報として生じうる。

(6) Someone rang the doorbell.

Steve bumped into the table.

Steve fell in the swimming pool.

Steve broke his arm.

My daughter died.

このばあい、ふつうには、上から下へと、表面の記憶に情報が持続される度合は、おおきくなると考えられるものである。つまり、ふつうには、上から下へと、情報は、その重要性を増すと考えられるからである。

Just は、これまで述べてきたような、時の副詞なしの文における、まさに、その時の副詞に相当する働きをする。

(7) Steve just fell in the swimming pool.

換言するならば、それは、伝達されていることが、話し手の表面の記憶から生じたものであることを示す、ひとつの標識であるといえる。(7) と (4a) とのちがいは、その文が、表面の記憶から生じたものであることを、明示的にしめしているか否かのちがひ

となる。また、just が、実際の時でなく、経験的な時をあらわすものであることは、(6)に、それを付けくわえても、意味するところが変らないことからいえる。

非総称の完了相 (non-generic perfective)⁵ は、また、情報が、まだ話し手の意識から消えさらずに、表面の記憶にあることを示している。

(8) Steve has fallen in the swimming pool.

(4a) と (8) とのちがいは、前者が、できごとそのものの、より関心があるのに対し、後者では、できごとの結果に、より関心があることにある。(8)は、もちろん、just をとりうる。

(9) Steve has just fallen in the swimming pool.

Just と非総称の完了相とは、ともに、情報が、話し手の表面の記憶から生じたことを示すものであるが、(9)においては、それが、重複の (redundant) 形であられたといえる。

4

情報が、話し手の表面の記憶から離れるとき、彼は、(4b) ないし (4c) のような、時の副詞を含む文を用いなければならなくなる。この際、Chafe は二つを区別する。(4b) のように、弱い時の副詞が用いられるのは、情報が、話し手の浅い記憶 (shallow memory) にあるときであり、(4c) のように、強い時の副詞が用いられるのは、情報が、話し手の深層の記憶 (deep memory) にあるときである、とする。

まず、弱い副詞を含む文から見てみよう。

(10) I went to the library last night.

I saw Jack a couple of days ago.

Steve fell in the swimming pool last Sunday.

My daughter died last month.

表面の記憶におけるごとく、情報が、たえず意識のうちににあるということはない、が、また、深層の記憶のうちに押しやられてもいない、という情報がある。ここに、浅い記憶を設定する理由がある。この浅い記憶では、比較的ささいなことがらは、記憶にとどまるとして、せいぜい一、二日、もっと重要なことであれば、少し長くともどまるであろうという。

しかし、ここでも、また、われわれは実際の時ではなく、経験的な時に係わっているといえる。(10)

の例を上から下へと比較してみよ。) なお、浅い記憶の特徴は、それが、比較的豊かで、正確に思い出すことができ、また、できごとの前後関係を、たやすく思いおこすことができることにある。

つぎのような文は、変であるという。

(11) I went to the library the night before last.

I saw Jack two months ago.

My daughter died in March of last year.

ここでは、できごとが、浅い記憶にあるものとして扱われているが、その浅い記憶にとどまる時の長さが、できごとと比して、長すぎるというのである。(10の例文と比較せよ。) もちろん、ここでも、われわれは、経験的な時に係わっていることは明らかである。(やはり、上から下へと比べてみよ。) (11) のような文は、ふつうには、深層の記憶から生じる情報を伝えるものであり、時の副詞は、強い副詞を含むという。したがって、それは(12)のようになる。

(12) The night before last, I went to the library.

Two months ago, I saw Jack.

In March of last year, my daughter died.

表面の記憶は、意識の表面かその近くにある情報をのみ含み、浅い記憶は、さかのぼっても、せいぜい数日とするなら、深層の記憶は、心にとどめられている大部分ということになる。また、深層の記憶は、浅い記憶とは異なり、それほど豊かでも正確でもなく、また、直ちに、できごとの時間的なつながりを示すことができない、という特徴がある。

浅い記憶と深層の記憶は、ほんとうに存在するのだろうか。それらは、質的なちがいでなく、たんに、量的なちがいでしかないのではないか。しかしながら、二つを区別する言語上の事実がある。それは、話し手は、弱い副詞と強い副詞とを、明確に区別して用いていること。その際に、話し手は、ある情報が、そのどちらに属するものであるかを、同時に区別していることである。

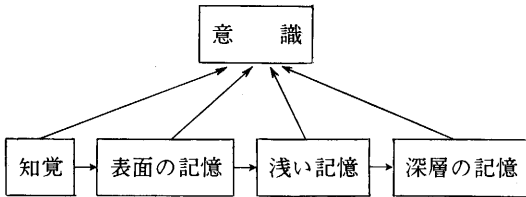
ときに、Chafe があげている、つぎのような文は、非常に興味ぶかい。

(13) I remember it as if it happened only yesterday.

これは、いま述べたことの例証となるのか、それとも反例となるのか。

意識は、その入力として、四つの源泉をもつ。
図式化すれば、つぎようになる。

(14)



まず、直接知覚によるとき、つぎに、直接知覚されたものが表面の記憶にあるとき、さらに、表面の記憶にあったいくつかのものが浅い記憶にあるとき、さいごに、浅い記憶にあったいくつかのものが深層の記憶にあるとき、である。

表面の記憶は、あることが、意識のうちに連続的に保たれている段階である。それが、表面から浅い記憶へゆくかどうかは、意識のうちに、それが再び、あらわれるかどうかによる。しかし、多くのものは、意識から消えて、ふたたび、あらわれることはない。それが、さらに深層の記憶へゆくかどうかは、浅い記憶のうちに、それが、どのくらい繰り返して意識にのぼったかによる。ただし、深層に至った記憶が、すべて、永遠に保たれるということはない。

このように、記憶は、あることが、どのくらい繰り返しかえし意識にのぼったか、あるいは、あらわれたかによって生じる、いくつかの段階であると考えることができる。意識のうちに、繰り返しかえしてあらわれるかどうかは、その情報が、個々人にとって重要であるかどうかにかかっている。この重要さが、これまで述べてきたように、まさに、経験的な時に関係している。

われわれは、言語上の事実を示すことによって、記憶には、三つの種類があることを述べてきた。なんら時の指示を含まない文脈にあっては、表面の記憶からの情報は、時の副詞なしで、浅い記憶からの情報は、弱い副詞で、また深層の記憶からの情報は、必ず強い副詞でもってあらわされる、というのが、その典型であった。もっとも、可能性としては、つぎのようなばあいを考えることができる。

(15) a. 表面の記憶から：

Steve fell in the swimming pool.Steve fell in the swimming pool a couple minutes ago.A couple minutes ago, Steve fell in the swimming pool.

b. 浅い記憶から：

Steve fell in the swimming pool yesterday.Yesterday, Steve fell in the swimming pool.

c. 深層の記憶から：

Last Christmas, Steve fell in the swimming pool.

さらに、表面の記憶からの情報を示すものとして、(8)のような、非総称完了相と、(7)のような、just のばあいがある。

このように、時の副詞は、記憶の深さを示す標識であるということができよう。われわれは、ここでは、つぎのように考えたい。記憶の深さが増すにしたがって、経験的な時、つまり、心理的距離はおおきくなる。それにつれて、主観的な表現から、より客観的な表現へと移る。浅い記憶では、時の副詞は、たんに、redundant な形でしかあらわれていないが、深層の記憶では、それは、必要欠くべからざるものとして、強調されて、文頭に生じるのである。なお、このばあい、後者では、時の副詞は新情報 (new information) をになっているのに対し、前者では、それは、旧情報 (old information) をになっている。⁶

(三つの記憶に対する、心理学上の考察が必要であるが、ここでは、いっさい、それには触れない。)

6

ここで、現在、過去、未来時制一般について、考えてみることにしよう。

話し手は、あるできごとを、知覚するとほぼ同時に、それをとらえて伝達するために、ことばを用いることがある。(14)の図でいえば、そのような情報は、知覚の段階に属するものといえる。このような伝達は、かなり、まれであるが、たとえば、実況放送で、野球のアナウンサーは、これをふつうに行なっている。

(16) O'Malley throws to first.

これは、現在時制のひとつの用法である。Chafe は、いわゆる史的現在 (historical present) も、この用法の一種である、とする。その際、語り手は、自分

の記憶にあるできごとを、あたかも、いま眼前にあるかのようにとらえる。

多かれ少なかれ、瞬間的なできごとを、とらえて伝達することは、ふつう、まれであるが、できごとが、ある期間持続するのであれば、それを伝える可能性は、より増してくる。この種の伝達は、きわめてふつうで、現在進行形でもってあらわされる。

(17) O'Malley is running back toward the fence.

(14)の図における、記憶のわくから生じてくるものは、それが、表面のものであれ、浅いのものであれ、深層のものであれ、すべて過去時制であらわされる。

(18) O'Malley threw to first.

しかし、過去時制によって伝えられることは、すべて、直接的な知覚によって、意識のうちに入ってきたものばかりとは限らない。間接的な、想像 (imagination) によって意識化されたものもある。たとえば、ラジオで(16)と、間接的に聞いて、それを、だれかに(18)と、直接試合を見ていたかのように、伝えることがある。

未来時制は、必然的に、想像によっていることは明らかであり、すでに、直接的に知覚したことは、すべて除外される。未来には、過去における同じように、三つの、心理的、経験的な時を区別することができるという。Chafe は、それを、表面の期待 (surface expectation)、浅い記憶 (shallow expectation) 深層の期待 (deep expectation) と呼ぶ。

表面の期待は、当の状況やできごとが、自分の意識から消えさらないうちに、生ずると、話し手が予期するときである。このとき、たとえ、なんら時の指示が与えられていない文脈であっても、話し手は、その期待を、時の副詞なしで伝えることができる。

(19) You're going to die.

I'm going to buy a newspaper.

I'm going to buy a new house.

Jane's going to get married.

いま、(19)のような文を聞いて、だれかが、When is that going to happen? と、たずねたとしよう。このとき、Five years from now と答えたとしたら、これは、まったく、始めに出した Dennis の例と同じような、おかしみを生じてしまう。

浅い期待は、話し手の予期する経験的な時が、より長くなる。その間、表面の期待のように、状況やできごとが、意識の表面ないし近くにずっとある、ということはない。しかし、この期待は、ひかて

き詳細、明確に予期されており、話し手の心のうちで適切に計画された期間に生じる。そのようなばあい、弱い時の副詞が用いられる。

(20) I'm going to buy a bike tomorrow.

I'm going to fly to Los Angeles next Friday.

I'm going to see Bill next month.

深層の期待は、話し手の予期する経験的な時が、もっとも長くなる。これは、来たるべき状況やできごとが、比較的よく秩序だてられた計画の期間に、生じることはなく、ともかくも、離れた、長期間にわたる予期である。これらは、強い時の副詞でもって、伝えられねばならない。

(21) Next Christmas, we're going to Tahiti.

By next winter, this roof is likely to collapse.

In a few more years, I'm going to buy a new house.

未来への期待と過去の記憶とが、このように対応するのはなぜか。それは、記憶と期待とを比較したばあい、われわれの心において、より確かな基盤をもっているのは、前者の方である。その確かな基盤のある方にのっとって、後者をとらえようとするからであるという。

7

新・旧情報 (ないしは未知・既知情報) は、発話の際に、話し手が、聞き手の意識のうちには、すでに何が存在すると仮定するかによって、生じてくるものである。旧情報とは、話し手が、いま、聞き手の意識のうちに存在すると仮定する情報であり、新情報とは、話し手が、いま、聞き手の意識のうちに存在しないと仮定する情報である。このように、新・旧情報とは、聞き手が、これまでに、ある情報を認識したことがあるか否か、ということに関するものではなく、いまの発話の時点で、それが、聞き手の意識のうちに存在するか否か、ということに関するものである。それは、情報が、先行する談話から引きだせる (recoverable) か否か、ということに関する。

これらが、典型的には、音調 (intonation)、代名詞化 (pronominalization)、語順 (word order) となつて、表面上あらわれてくる。

たとえば、部屋で棚の本の整理をしているとき、

人が入ってくる。あいさつを交して、つぎのような会話を始めたでしょう。

- (22) I just found some books that belong to Peter.

I wish I knew where Peter's living now. 代名詞 I は、それが、相手に最初に述べるものごとでありながらも、旧情報として、低い声の高さでもって発音される。⁷ これは、いま話をしているのは、私なのであって、とうぜん、相手はそれを認識しているからである。

最初の文における名詞 books は、高い声の高さでも、低い声の高さでも発音されうる。もし、低い声の高さで発音されるとするなら、それは、相手が、私のしていたことをすでに見ていて、本の概念が、相手の意識のうちにあると仮定するときである。もし、高い声の高さで発音されるとするなら、それは、いま述べたと反対のことを仮定するときである。前者のばあい、低い声の高さで発音されるばかりでなく、それは、代名詞化もされうる。

- (23) I just found some that belong to Peter.

Peter は、最初の文において、新情報を伝え、高い声の高さでもって発音される。

動詞は、一般に、新情報を伝える。ただし、それが、後にさらに、新情報を含むものを伴うときには、低い声の高さで発音される。

二番めの文では、すでに最初の文が発せられたことによって、いろいろなことが、相手の意識のうちに導入されている。したがって、たとえば、Peter は低い声の高さで発音される。また、その代名詞化も可能である。動詞 living には、高い声の高さがある。後につづくのが、副詞 now であり、この now は、低い声の高さで発音されるからである。これは、相手が、いま聞き手として、その場面に立ちあっているのであるから、とうぜんのことである。

ここで、対照をあらわす文を考えてみよう。

- (24) I killed Cock Robin.

これは、殺人をした可能性のある者のうちで、私が、実際にそれをやったことを示している。非対照文における新情報と、対照文におけるそれとは、むしろ性質が異なるものであり、二つは区別されるものかもしれない。また、一般に、旧情報は代名詞化されうるが、代名詞化されたものが、つねに、旧情報をあらわすとはかぎらない。(これらに関しては、小川 (1974, p. 96 ㉔.) を参照されたい。)

8

プラーグ学派言語学では、発話の機能的な分析をめざす。文において、個々の要素は、種々の度合の Communicative Dynamism (CD) が付与されている、とするものである。この CD の度合は、文の要素が、伝達にどれだけ寄与するかによって決まる。言いかえれば、それは、文中での、既知の情報と未知の情報の相互関係によって、決まってくる。

CD の度合がもっとも低いのは、すでに、聞き手の意識のうちに存在すると思われる情報で、それが、いわゆる Theme である。CD の度合がもっとも高いのは、聞き手の意識のうちへ新しく導入される情報で、それが、Rheme である。^{8, 9}

9

旧情報ないし既知の情報は、言語外の要素によっても与えられる。たとえば、いま二人が通りを歩いている。向うからもう一人がやってくる。そのとき、二人のうちの一人が、つぎのように発したでしょう。

- (25) I know that guy.

このばあい、that guy は、低い声の高さでもって、既知の情報としてあらわされている。けっきょく、このような状況において、話し手は、聞き手も、自分とまったく同じ概念化をしていると、仮定するからである。

発話における話し手はだれで、聞き手はだれか、¹⁰ 話し手と聞き手とのあいだの社会的関係、発話の時間的、空間的座標などの意識も、言語外の要素であるが、それらは、明らかに既知の情報である。したがって、I, you, now, here, などは、ふつう、低い声の高さで発音されることになる。(ただし、対照的なばあいは、その限りではない。)

- (26) I'd like to visit Japan,

Henry would like to talk with you.

You may go in now.

I didn't think he'd come here.

さらに、それらは、削除されさえる。¹¹

- (27) (I'm) Sorry, Captain.

(I'd) Like to have a little talk with you, Howard.

(Do you) Remember I wrote you that he smashed up the car again?

You may go in.

I didn't think he'd come.

これらは、また同時に、ことばの余剰性 (redundancy) を示すものであるともいえよう。

すでに述べたように、旧情報ないし既知の情報は、もちろん言語的にも与えられる。

- (28) I just found some books that belong to Peter.

I wish I knew where Peter's living now.
(=22)

二番目の文において、Peterは、すでに既知の情報である。ただし、この既知性をうるのは、Peter それ自身ではなく、Peter によって象徴されるところの概念である。したがって、(28)にかわって、たとえば(29)のように言うこともできる。

- (29) I wish I knew where that guy's living now.

that guy は、もちろん、低い声の高さで発音される。

個別的 (particular) と総称的 (generic) に関する、つぎのような文を考えてみよう。

- (30) a. Yesterday I had my class disrupted by a bulldog.
b. I'm beginning to dislike bulldogs.
(31) a. We're having a dinner guest who's an Ethiopian.
b. I wish I knew what Ethiopians like to eat.

それぞれ、a の a bulldog, an Ethiopian が個別的、b の bulldogs, Ethiopians が総称的である。このばあい、総称的な後者は、既知の概念として、低い声の高さで発音される。このように、あるものの個別的事例が、聞き手の意識のうちに導入されると、その総称的概念も、同時に導入されることがわかる。その逆も、また真である。

- (32) a. I'm beginning to dislike bulldogs.
b. Yesterday I had my class disrupted by a bulldog.
(33) a. I wish I knew the favorite food of Ethiopians.
b. We're having an Ethiopian for dinner.

つぎのような文は、どうであろうか。

- (34) a. Yesterday I had my class disrupted by a bulldog.
b. I'm beginning to dislike dogs.
(35) a. We're having a dinner guest who's

an Ethiopian.

- b. I wish I knew what Africans like to eat.

これらの文が、(30)(31)の文と異なるのは、b において、bulldogs, Ethiopians が、より包括的な dogs, Africans と、それぞれ、なっていることである。

個別的な a bulldog, an Ethiopian が導入されると、(30b), (31b)におけるように、その総称的概念も、また既知のものとして導入される。しかし、(34), (35)におけるように、その総称的概念が、さらに一段あがって、dogs, Africans となると、このばあい、それは、既知、未知のどちらの可能性もありうる。さらに一段あがって、(34b) が、つぎのような文にとってかわるとすれば、animals は、とうてい、既知の概念としては扱われなくなるという。

- (36) I'm beginning to dislike animals.

したがって、ここには、bulldogs, dogs, animals というように、しだいに、その既知性の減少する段階がみられる。

いままで述べてきたのとは逆に、より包括的な総称的概念が、聞き手の意識のうちに導入されるばあいには、その個別的な概念が、同時に、既知のものとして導入されることはない。

- (37) a. I'm beginning to dislike dogs.
b. Yesterday I had my class disrupted by a bulldog.

これは、ブルドッグは犬であるが、犬は、必ずしも、ブルドッグではないからである。

ともに、同一の総称概念に属するが、それらが互いに異なる、個別的事例を示すばあいについて、考えてみよう。

- (38) a. Yesterday I had my class disrupted by a bulldog.
b. Last week my cat was chased by a bulldog.

それぞれの文のブルドッグは、異なるものであるが、それにもかかわらず、b における a bulldog は、既知の概念として扱われる。ただし、(38b) は、対照的な意味となる。

既知性が、ひとつの概念から他の概念へと、拡張される例としては、さらに、つぎのようなものがある。

- (39) a. Yesterday my fanbelt broke.
b. I couldn't use the car all day.

このばあい、話し手は、b における the car を、新

情報とも、あるいは旧情報とも、みなすことがあるという。けっきょく、全体と部分 (part) の関係にある二つのものは、部分が、まず導入されると、その全体も、任意的に (optionally) ではあるが、既知性が与えられる。これに関連しては、Chafe のいう、定 (definiteness) の概念があるが、ここでは、触れないことにする。¹²

個別と総称、さらに部分と全体については、たとえば、含意 (entailment)¹³ 一般の問題としても、とらえられるべきものであろう。

10

ことばは、話し手から聞き手へと、情報を伝達するものであるとするなら、話し手と聞き手の存在は、会話が成立するうえで、欠くことのできない条件である。われわれは、小論で、この観点到立つならば、どのように言語現象がとらえられるかを、また、逆に、ことばを正しくとらえるためには、いかに、このような観点が不可欠であるかをみてきた。^{14, 15}

(1974. 9)

注

- * これは、北陸言語学英語学セミナー (1974年9月14日 富山大学) において口頭発表したものをさらに発展させたものである。なお、稲積包昭、沢田治美両氏には、いろいろと助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。
1. ここでの議論は、とくに Chafe (1973), Chafe (1974) によっている。
 2. 用例は、以下 Chafe からの借用。
 3. 下線は、もっとも高い声の高さ (highest pitch) がそこにあること、つまり、そこが音調の中心であることを示す。
 4. Chafe (1973, p. 266) は、ここで、話し手による直接的知覚のみを表面の記憶とし、話し手による間接的知覚を、そこから除外しているが、これには問題があろう。
 5. 総称表現のばあいには、たとえば、「Steve は、これまで、よくプールに落ちたことがある」という意味になる。
 6. 新情報、旧情報については、小川 (1974) を参照のこと。
 7. ここでは、対照的なばあいは考えないことにする。これについては、後で少し述べる。
 8. なお、さらに、中間的な CD の度合として、Transition を認める。そのひとつの例は、つぎのような定動詞 (finite verb) で、これは典型的に、時制 (tense) や相 (aspect) をあらわす。

George was very rude.

これに対する論評は、Chafe (1974), p. 120.

9. Theme-rheme に関する、よりくわしい議論としては、たとえば宮井 (1973) などがある。
10. Ross (1970) の Performative analysis の出発点も、まさに、ここにある。
11. Ōshima (1970, p. 20) からの例を含む。
12. これについては、たとえば、青木 (1974) が参考になる。
13. 安井稔 (編) 『新言語学辞典』 pp. 156-58. 参照。
14. これに関しては、Ōshima (1970) も参照のこと。さらに、村田 (1974), Halliday (1970), 安井 (1974a)。
15. また、さいきんには、安井 (1974b), 安井 (1974c) のような、注目すべきものがある。

参考書目

- Aoki, Haruo (青木晴夫) 1974. 「意味と言語の構造」
言語 9: 29-38.
- Chafe, W. L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- _____ 1973. Language and memory. *Language* 49: 261-81.
- _____ 1974. Language and consciousness. *Language* 50: 111-33.
- Halliday, M. A. K. 1970. Language structure and language function. In Lyons (ed.), *New Horizons in Linguistics*. Harmondsworth: Penguin Books, pp. 140-65.
- Miyai, Shoji (宮井捷二) 1973. Theme - rheme 構造.
Random 1: 29-42. 東京外国語大学院英研.
- Murata, Tsunekazu (村田経和) 1974. 「テキストリングイステイクについて」 言語 9: 39-46.
- Ogawa, Hiromichi (小川洋通) 1974. 「新しい情報と旧情報」 富山大学教育学部紀要 22: 91-7.
- Ōshima, Shin (大島 新) 1970. The addresser and the addressee. 英語学 3: 16-33.
- Ross, J. R. 1970. On declarative sentences. In Jacobs and Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Mass.: Blaisdell, pp. 222-72.
- Yasui, Minoru (安井 稔) 1974a. 「主語とは何か」
『英語学の世界』大修館, pp. 25-58.
- _____ 1974b. 「言外の意味は求められないか」
— 言の意味と言外の意味 (1) —
英語青年 10: 306-8.
- _____ 1974c. 「新しい聞き手の文法」 (1)
英語教育 10: 44-6.